

## 第7章 総合考察

読書活動は、意識・非認知能力や認知機能に様々な望ましい影響を与えることが報告されている。しかしながら近年、成人の読書量の低下が懸念されている。また、その実態、および過去・現在の読書活動が意識・非認知能力や認知機能に与える影響に関する検討は十分でない。加えて、子どもの今後の読書活動を推進するための知見も少ない状態である。そこで、本調査研究は、読書活動の実態と経年変化について明らかにしつつ（第2章、第3章）、情報環境の変化や過去の読書活動が、現在の意識・非認知能力（第4章）や認知機能（第5章）に与える影響を検証し、子どもの読書活動の推進に資する結果を得る（第6章）ことを目的とし、分析した。

分析の結果、紙媒体による読書冊数および読書時間の減少がみられた。一方、スマートフォンなどのスマートデバイスを利用した読書時間の上昇がみられた。また、年代により読書の実態が部分的に異なることも示された。加えて、紙以外のツールを利用した読書活動の違いによる現在の意識、能力を比較した結果、ツールに関係なく読書をしている者の方が、そうでない者に比べ自己理解力、批判的思考力、主体的行動力が高かった。過去の読書量と現在の意識・非認知能力との関連を分析した結果、どの指標においても小中高の読書量が多い者はそうでない者よりも有意に高く、特に、小中高の読書量が少ない者との間に大きな違いみられた。認知機能との関連でも小中高の読書量が多い者の方が小中高の読書量が少ない者よりも高いことが示唆された。そして、小中高の読書量が多い者は、抽出された絵本を読んだこと、地域の図書館で本を借りたこと、図書委員、「子ども図書」、「読書コンシェルジュ」の活動をしたこと、目次、前書き、解説など本文以外の部分も読むこと、同じ本を繰り返し読むこと、ジャンルを問わず読むこと、それに本を持ち歩いて読むことがポジティブに関連することが示された。

以上の結果から今後の読書活動の推進を考えた場合、引き続き紙媒体による読書の推進に力を注ぎつつ、スマートデバイスの個人所有率の高さを踏まえ、すでに行われている様々な電子メディア（パソコンを含む）を介した読書活動の推進が効果的であると考えられる。しかしながら、年代により読書活動の実態は部分的に異なるため、各年代に合わせたアプローチが必要であり、今後詳細に検討することが望まれる。また、小中高と読書活動を継続することで、意識・非認知能力、認知機能の高さにつなげるためには、小学校高学年において家庭や学校で、本調査研究で得られたような読書活動の経験ができるように取り組んでいく必要がある。